

加賀市の氷室・雪穴跡と雪氷利用

竹井巖(北陸大)、神田健三(雪の科学館)、河田脩二(金大名誉教授)

1. はじめに

日本海に面した積雪地域では、冬の雪を夏まで貯蔵して利用することが古くから行われてきた。加賀市域においても明治から昭和期にかけて貯雪施設(氷室・雪穴)が設置され利用されていた。このことは雪氷冷熱エネルギーの利用例の観点から興味深いものがある。加賀市の貯雪施設の分布・現況と利用実態を報告する。

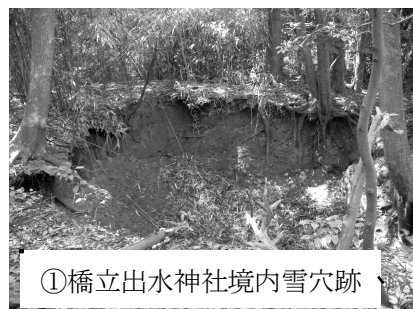
2. 貯雪施設(氷室・雪穴)の分布

石川県統計書によると、加賀市域(大聖寺・旧江沼郡)の大正14年における登録雪貯蔵業者数は、記録上最大数の27を数える。この地域に、貯雪施設が少なくとも27箇所は設けられていたことを意味する。

これまでの調査によると、大聖寺藩の城下町であった大聖寺地区に4箇所、海岸や柴山湯の周辺に位置する橋立・片山津地区に8箇所、温泉や保養施設のある山代・山中地区に10箇所の計22箇所の氷室・雪穴が確認できた。(なお、大聖寺地区には、平成15年に復元された時鐘堂下部へ新規の氷室が設けられている)

3. 氷室・雪穴跡の現況

上記貯雪施設の多くは、危険防止のため埋め戻され、土地造成等で消失している。しかし、いくつかは土坑が現存し、貯蔵の実態把握に資することの可能なものもある。土坑の残存良好なものとしては、橋立地区の港の西側丘陵上の雪穴跡(5m×4m×深さ3.5m 直方体状)、橋立出水神社境内の雪穴跡(径7m 深さ5mのすり鉢状)、および大聖寺地区の荻生町稲荷神社境内の氷室跡(5m×7m×深さ4m 逆角錐状)がある。また、埋め戻されているが、痕跡が確認されるものも片山津地区(4m×7m 文献(1))や山代地区に認められる。



①橋立出水神社境内雪穴跡



②荻生町稲荷神社境内氷室跡



4. 貯雪施設(氷室・雪穴)の利用実態

上記貯雪施設による貯蔵雪の利用が大正期から昭和初期にかけて盛んであったことが、聞き取り調査等で窺えた。大聖寺地区の氷室は、氷室の日の祝いの氷や魚屋料亭の保冷用途に、橋立・片山津地区は鮮魚の保冷運搬用途に、山中・山代地区は魚屋料亭等の生鮮食料の保冷用途および熱冷まし等の医療用途に使用されていた。特に、片山津地区の貯蔵雪が鉄道を利用した鮮魚長距離輸送の保冷用途であったことは注目される。

<関連文献>

(1)竹井「大正期における石川県の氷室(雪室)と鮮魚鉄道輸送」(2008) 北陸大学紀要、第32号、p.155-166.

(2)竹井、神田、小川「石川県の氷室(雪室)の調査リスト」(2009) 北陸大学紀要、第33号、p.109-124.